

◆ 【海員随想】 仲積船の航海② 及川帆彦

海と空だけの航海が長引いてくると、ときおり妙な考えが浮かんで来たりする

「ひょっとすると、人類は滅亡したのではないか。そして本船だけが奇跡的に生き延びて海の上をさまよっているのではないか」

つまり、かのノアの箱舟になったような心境である。

そのことを同僚の操舵手に話すと「俺の考えることは、君とは少し違うんだな」と言う。

「このまま、南氷洋へ行っても捕鯨船団には会えずに、南氷洋を、つまり南極大陸の回りをぐるぐる走り回ることになるのではないかと、心配になったりするんだ」

燃料油や食料を補給しなければ、ぐるぐる走り回ることにはできないけれど、そんな心理状態にもなろうというものである。

夜、乗組員たちが一杯やりながら交わす話も、こんな具合になる。

「あんたの奥さんは若くて美人だから、今ごろ浮気をしているんじゃないかな」

「俺としては浮気をしてくれた方がいいよ。気が楽になるというものだ。俺は何もしてやれないのだから」

「うちのカァちゃんはブスだから、浮気の心配はないな」

「さあ、そいつはわからんぞ。たで食う虫も好き好きというからね。知らぬは亭主ばかりなり、ということもあるしね」

「そうそう。亭主達者で留守がいい、なんて言ってね」

もちろん、ファックスで内外の主なニュースは入ってくる。だが仮に、内地で総選挙があって内閣が変わったとしても、乗組員の生活には何の影響も与えないことになる。大きなニュースも、対岸の火事というよりも、遠いよその世界の出来事なのである。

船乗りを辞めて陸に上がってみると、陸の生活というのはわずらわしいことが多いし、雑音も多い。冠婚葬祭、面倒な親せきや近隣との付き合い、電車や自動車の騒音、セールスマンも来れば押売りも来る。まったくもって厄介でうるさいことだ。

浮世離れした仲積船の航海を懐かしく思い出すのである。

「海員だより」